

### 親を手本にして育っている

わたしは、外から家に電話を掛けた時、電訪口に出て答えているのが、家内だと思えば娘だったり、娘だと思えば家内であったりして、つくづく、親子は似ているものだなあ、と感心しています。

普段、肉声で聞くと、親子の音質の違いがよくわかって、決してまちがえることはないのですが、受話器を通すと、微妙な音質の違いが消えるので、双方が全く同じものに受け取れてしまうのです。

わたしは、この電話でのまちがいを通じて、普段、親子の違いを聞き分けていたのは、音質よりも、話し方、抑揚の違いであると思っていたことが、誤りであったことを知りました。このように、子どもは親の示すものをすべて吸収しているのですから、子どもの言葉づかいや話し方が悪いからと言って、子どもを責めるわけにはいきません。つまり、子どもの言葉づかいや話し方が悪いのは、親の示した手本が悪かったためなのです。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年二、三か月の赤ちゃんを選んで、毎日15分くらい、話を聞かせてやる赤ちゃんのグループと、

そういうことをしないグループとを作り、約半年間の結果を調査したところ、毎日定期的に話を聞かせていたグループの赤ちゃんの方が、知能が著しく伸びていた、ということがわかりました。

言葉というものが、いかに幼児の頭脳に良い刺激を与え、知能を発達させるか、ということが、この実験でよくわかります。

ですから、まだ言葉を聞き取る能力などないと思われるような赤ちゃんに、しきりに話しかけているお母さんをよく見かけますが、これは大切な教育になっているわけです。この場合、赤ちゃんは返事ができないだけで、後日のためにちゃんとそれを録音しているのですから、お母さんは、できるだけ心をこめて、美しく、優しく、語りかけることが大切です。

おむつを取り換える時にも、ぶつぶつ小言をいったり、なにか怒ったように黙ってしないで、「花子ちゃん、いい子ね」と呼びかけたり、「花子ちゃん、きれいきれいしましょうね」と話しかける。これが子どもを育てる“言葉の教育”です。